

---

# 愛を召しませ

Diverge

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

愛を召しませ

### 【Nコード】

N6434M

### 【作者名】

D i v e r g e

### 【あらすじ】

内向的でかなり動じない大学院生、市瀬葵が異世界トリップ！したはいいが、夢だと思ってブラブラ生活してたせいで密入国の疑いで逮捕されてしまう…。「愛の謎を解き明かしたら大金持ち！」との言葉を胸に、クセのある刑務幹部たちや囚人たちの好奇の視線をスルーしながら、愛の一滴まで枯れ果てた無法地帯Ⅱ異世界刑務所でのんびりとLOVEを探求する葵のお話。

## 序章

大学にいた頃、発達精神生物学者のクレイマー博士が言った。

『脳の研究に携わるたぐさんの分野が、今も解き明かすことのできない一番の謎はなんだと思う？

それは愛。一生かけて愛し愛されるメカニズム。

愛を暴くことができれば、アオイは大金持ちになれるよ。

…だからね、これを持っていなさい。』

そうして渡されたのは、一枚の茶色い封筒だった。

コンビニの商品棚に束で並んでるような、何の変哲もない、中身は空っぽの封筒。

科学の世界において、妙に哲学的な、情緒あるポエムちっくなお言葉だったような気がする。

だけど葵が覚えているのは、この一言。

『アオイは大金持ちになれるよ。』

ごめんね、クレイマー博士。

でも1DKのアパートにね、エアコンなくてさ。二年前の夏に買った扇風機も昨日、動かなくなってるね。

今夜は寝苦しいんだよ。

くそう。これが院生の現実か。

## ラッセローネ

翌日十七時二十七分、上空。

刑務艦ラッセローネの二階通路で、白い床に岩を砕く波のような水音が弾けた。

三度目だ。

葵は空になったバケツの取っ手部分をモップの先に提げると、冷水をぶっちゃけたばかりの床を拭き歩いた。

靴のサイズ30ぐらいの大きい黒い足跡が点々と白い床に浮かんでいる。

「アオイ。お掃除？」

行く先の角からウサギおじさんが現れた。

「後で僕らと一緒に一服？」

「私タバコ吸わないんで」

葵はそう言っ、まるで見せつけるように両手で持ったモップを忙しく動かした。

ウサギおじさんは重たげに頭を傾げると、そう、と葵に背を向けた。

歩み去るウサギおじさんの後ろ姿が、新しい足跡を紡いでいく。

きりがないわ。

葵は床をモップがけしながら小さくため息をついた。そう言えばこれに似たギリシャ神話を読んだことがある。

神に背いた罪人は、丘のてっぺんまで大きな岩を押して登れと言われる。でもてっぺんにつく一歩手前で、岩は毎回、彼の脇をすり抜けてふもとまで転げ落ちてしまうのだ。

確か設定は地獄だったような。

「アオイ。お掃除？」

別のウサギおじさんが葵の背後から呼びかけてきた。

「後で俺らとランデブー」

「私男嫌いなんで」

葵は振り返らずに言った。振り返ったら今モップがけした所にウサギおじさんの足跡を見ってしまう。見てしまったら掃除したくなってしまう。

それが人間の心理ってもんだ。

背後で足音が遠ざかっていき、葵は手を止めてモップを壁に立てかけると、小さく息をついた。

「アオイ。お掃除？」

卵色のウサ耳が通路の先でぴよこつと生え、葵は慌ててモップを手にくると背を向けた。

なんて疲れる夢だろう。

春の夕焼け空がガラス張りの壁一杯に映っている。

葵はやがて立ち止まり、遠い目をしてうっすらと浮かぶ下弦の月の白さを眺めた。

## 禁断の五階

ウサギおじさんは葵が勝手につけた名称だ。

おじさんは卵色にふわふわと膨らむ着ぐるみの頭部だけを纏っていた。

触れてみないと解らないが、毛糸や麻糸よりもっと頑丈な加工繊維の素材だ。

目の部分は拳サイズの赤いビーズ玉を浮かべており、中に入っている人物はそれらを透けて世界を見ているらしい。

おじさんは首から下はケブラーベストに似た軍事用らしき武装を纏っていた。

ぶっちゃけ可愛い頭部と比例して、ちょっと気持ちが悪かった。

☆

同日二十時二十分。

ウサギおじさんが通路側から執行官庁室のドアをノックして開いた。

葵は二人のウサギおじさんと連れ立って入室した。ラッセローネの五階は清掃係は立ち入り禁止とされているため、ここに来るのも、この階で働く人物に会うのも初めてだ。

室内奥の別の扉が開き、執行長が現れた。二十代後半の容貌をした、白肌の背の高い男だ。

まっすぐな藍色の短髪が頬から顎までの細身のラインを覆っており、目鼻立ちはくっきりと整っている。

瞳は灰色。嵐の前の空の色を思わせる深い色は、年若くして執行長としての貫禄を視線に宿していた。

「君がアオイか」

執行長はそう言って、葵が返事をするのを待たずに彼女の方へと歩いてきた。上質なブーツのかかどが室内に大きく足音を響かせる。葵はウサギおじさん二人に挟まれて居心地悪い思いで俯いた。

「君はなぜここに呼ばれたか解るか？」

「：いえ。ここに呼ばれたってことしか」

「君は今夜ここに来ることを他の誰かに話したか？」

葵は内心ため息をついた。

「いいえ」

私、何かしたのだろうか。

執行長の鋭い視線と辛辣な口調に、葵は尋問されているような気持ちになった。

この美形はじぶんの脳が作り出した人物。つまりじぶんは創造主。夢の中だと解っていても萎縮してしまうじぶんにちょっと嫌気が差す。

葵は正面に立った執行長に顔を上げた。

アメリカ帰国子女の彼女の目には、相手の顔のパーツは西洋人の中では掘りが浅い方に見える。

通りすがれば思わず二度見してしまう美貌だが、どこか作り物のような表情の抜けた面立ちだった。

「密入国。ラッセローネへの不法侵入に、窃盗罪。もろもろの制約違反の容疑で君を仮逮捕する」

無表情のまま低くかすれた声で告げられ、葵は眉を潜めて左右のウサギおじさんたちへ交互に視線を向けた。

執行長はしばし葵を見つめると、ロングコートのような長い羽織物の懷から茶色い封筒を取り出した。

見覚えのあるものに葵はあつと声を上げる。

「それ私のうちわもどき…」

「今着ている服を始め、君の所持品は全て没収させてもらおう。どうやってここへ侵入したのか説明してもらいたい」

執行長は薄い唇を微弱歪ませて、手元の茶色い封筒で俯き加減の葵の顎を持ち上げた。

葵は慣れない男性との近距離に瞬きした。



## 執行長の鬱憤

私の名前は市瀬葵。大学院一年生で出身は日本です。

朝早くに船の二階に倒れていたところを、ウサギおじさんたちに発見されました。

空飛ぶ船というメルヘンちっくな設定に夢だと解り、ただ目立たずに平和に一日中お掃除してました。

おかげで二階の床だけがぴかぴかです。

翌朝零時00分、上空。

刑務艦ラッセルローネ五階の自白室にて、デスク越しに岩を砕く波のような水音が弾けた。

「…さ、寒い」

「寒いのは俺だ」

執行長はそう言って、空になった水筒をデスクの上に放り出した。水筒はころころと天板を転がり、やがてカーペットの床へと一直線に落ちる。

冷水をぶっかけられた葵は黒い髪を額辺りに揺らし、その奥から彼を睨んだ。

「なんだその目は」

「なんだじゃなくて葵と申します」

「…アオイ。すでに挙げられている容疑に重ね、公務執行妨害も積もうか？」

執行長はそう言って着ていた羽織り物を脱ぐと、身を反転させて木椅子の背に被せた。

葵は椅子の横に立つ執行長を見て上流なレストランの警備員を思い出した。

黒い襟シャツと黒いネクタイ。半袖ベストの胸ポケットは金糸で中国風の水墨画のような獅子を縫い込んでおり、黒いズボンの腰元は薄切りにした金輪を繋げたベルトを引っ掛けている。

「公務執行妨害で。私は真実を話しています」

葵はそう言って前髪の水分を指先で梳いた。見えないぐらいの細かい水滴がデスクの上に飛び散る。

「ほう。じゃあ読み上げてみる」

執行長はデスクに伏せて置かれていた用紙を葵の目線上に揺らした。先ほど彼の手によって綴られた葵の自白記録書だ。

「読めません」

「何だと？」

「字が：知らない言語みたいで」

葵はちらりと上目使いに見て言った。万年筆に似た極細のペン先で一ページびっしりと書かれた文字は、見たことのない形を網羅していた。英語でも日本語でもない。

執行長はかすかに口角を歪めた。石のような濃いねずみ色の瞳が面白そうに細められる。

「ほう？ おかしいね。これは君の夢の中なんじゃなかったか？」

「はい。」

「じぶんの夢のくせに出てくる字が読めないのか？」

執行長は言って葵の目の前で用紙を鳴らすように荒々しく振ると、円型にくり抜かれた形の木椅子の座面に腰下ろした。

（夢の中の住人のくせに生意気な。）

そう思うのだが、葵には勝気に口に出すことが出来ない。

「現実では春じゃなく、夏の真っ只中なんです」

葵は読めない自白書の代わりに、全く同じ内容のことを繰り返して説明することにした。

「夜中に暑くて、その封筒をうちわ代わりに使ってたんです。そのうち寝ちゃったみたいで…、気がついたらこの船の二階にいました」

そこ、の下りで葵はデスクの上に置かれる茶色い封筒を指差した。

三年以上前に、大学で知り合ったクレイマー博士に頂いた、空っぽの封筒。

なんでこんなもんが夢の中に紛れ込んでんだ、と葵は不幸とも思える現状で、茶色い封筒を指差しつつ、つくづくじぶんの脳を訝しがった。

## 執行長の鬱憤（後書き）

お付き合いくださり、ほんとうにありがとうございます！

次のお話で背景も見え出し、ストーリーも進みます… ><

## 執行長の決断（前書き）

ちよつと長くなりました…><

## 執行長の決断

執行長視点の話によると、葵は三つの容疑をかけられていた。

一つはラッセローネ艦の本土であるザリア地方に申告無しに入国した疑惑。

一つはラッセローネ艦そのものに不法侵入した疑惑。

一つは日中、二階のカフェテリアの食べ物勝手に食べたり、掃除用具を盗んだりした疑惑である。

容疑者の葵は朝一時を過ぎた未だに、ラッセローネ執行機関最高責任者である執行長と二人、自白室に籠ってテーブル越しに向き合っていた。

「最後の容疑については100パー潔白です。パジャマ姿の私は掃除のおばちゃんならぬ掃除のおねえちゃんに見えたようで、ウサギおじさんたちにむりやり掃除道具を」

「ウサギおじさんじゃない。言っただろう？彼らは囚人、犯罪者だ」

葵が言う傍から、執行長は白皙の頬のラインに藍色の髪を揺らし、首を横に振った。

「素行良好の一握りの囚人らに、清掃や大作業に携わる特権を与えているんだよ。君も連中と同じにあのゴミみたいな着ぐるみを着ることになるかもな」

不躰を通り越して、耳障りなのは気のせいだろうか。

執行長が形の良い眉を片方だけ吊り上げて放った言葉に、葵は内心むかっと顔をしかめる。イケメンだけど近付きたくない人だな。

執行長は口元で両手を組んだまま、居心地悪そうに身じろぎする

葵を濃灰色の瞳で捉えた。

「君の話は当然ながら信じられない。というより、知能障害者を装って免罪を狙っているように見えるな」

「つまり装ってないとするとなあたの目には私は知恵遅れに見える」と

「知っているか？このラッセローネには女囚人は一人もいない」  
思わずむっと眉を寄せた葵に、なにやら恐ろしげな言葉がかけられた。

「アオイ。どのみち投獄されるなら、今のうちに真実を話して俺におべっかを使っておいた方が後々便宜が利くかと思うが？」

執行長はそう言って組んでいた手を解くと、デスク越しに腕を伸ばして葵の頬に触れた。

なんだろう。今ストレートに爆弾を落とされたような。

「：どちみち投獄、って」

葵はじぶんの顔をすっぱりと包み込んでしまえる大きな手のひらを横目にした。

「君が本当に今日覚めたばかりの赤ん坊のような存在なら、この世界のシステムは知らないんだろうな」

執行長はそう言って軽く説明を始めた。

飛行船ラッセローネは、刑務艦と呼ばれる施設だと言う。

刑務艦は地域内を巡回して犯罪を取り締まると同時に、囚人を収容する公務を担っている。つまり、怪しい奴を見つけて逮捕し、判決によってはそのまま拘束してしまうのだ。

仮逮捕された容疑者たちに対する判決は、ラッセローネ内にある裁判所にて釈放か収容かを下されるらしい。

ちなみに弁護士も立会人もいない。裁判は裁判官と容疑者だけで行われる。

何この横暴なケーサツ組織。

「横暴？」

葵の言葉に、執行長はデスクの向こう側で口元を手のひらで覆い、頬杖をついた。濃灰色の目が細まる様は、獲物を前にした豹みたいだ。

「だ、だって。一つ一つの船が独断で、捕まえた人の扱いを決められる、という風に聞こえるんですが」

葵は両手のひらを膝の上に置いて、こわごわながらも言葉を紡いだ。執行長は彼女を見つめながら、頬杖をつく手の中指と人差し指でじぶんのこめかみ辺りを軽く叩く。

「裁判はラッセルローネの四人の最高責任者たちが立ち会うことになっている」

「四人？」

「そう。医務、監査、娯楽、そして執行機関の最高責任者たちだ」  
「つまり四人で決めるから独断じゃないんだよ、と？」

そんな無理やりな。しかも執行長のこいつも四人の中に含まれているんじゃないか。

沈黙する葵を前に、執行長は頬杖をつく手のひらの裏で口角を吊り上げた。

「君の裁判は明日の朝だ」

「え？ そんなスピーディに」

葵の言葉に執行長は肩を竦めた。今日捕まって明日が審判の日って、日本ではあり得ない兆速かと思うのだが。

「今のところ、俺が提出できるのはこの頭の螺子が飛んだような自白書一枚と、そのしなびた封筒ぐらいだな」

執行長はそう言って茶色い封筒と自白書を揃えて手に持ち、椅子から腰を浮かした。

葵はゆっくりとデスクを迂回してくる長身の黒い制服姿を目で追う。



「これ以上は時間の無駄だ。明日の朝まで君の身柄を一階の個別牢で軟禁する」

執行長はそう言って、ああ、と思い立ったように葵の座る横で立ち止まり、椅子の背に手を置いた。

「君が持ち込んだ服も脱いでもらおうか。別の物を用意しよう」

「あなた汚職刑事の鏡ですか」

どうやら夢の神様は私に恨みがあるらしい。

葵はセクハラ大魔王として彼女の中で伸し上がりつつある男の美貌から顔を背け、心の中でいるのかいないのか微妙な存在に毒付いた。

**独白**：甘い状況なんじゃなくてえ？

バカな事をした。くそう。

葵は石造りの牢屋の角に座り込んで、膝を抱えていた。

灰色の壁はまるで氷山みたいに冷たく重く、牢の中のちっぽけなじぶんの容積に押し掛かってくる。

小一時間ほど前に、自白室にて「脱げ」命令を出された葵は、心ゆくままに執行長にニーキックをお見舞いした。

そう、ドコンと。股間に華麗なる一撃。超運動神経鈍いはずなのに超綺麗に入った。

次の瞬間には、葵は糸纏わぬ姿で一階の個別牢に投げ込まれていた。

つまりフルモンティ。葵は今、素っ裸だ。

牢屋の外通路は同じ石造りの壁に蟬燭立てを張り出し、四つ先の先で小さな炎を揺らしていた。空飛ぶ船という胡散臭い上に便宜利かなそうな代物のくせ、設備だけは立派な刑務所である。

しかも豪華に中世の暗黒時代風味。

己の裸体をまぶしく照らしてくださる赤い陽炎に、葵はもーいやと目を瞑っていた。

まさか明日の裁判にまでこのR18な姿で引っ立てられるわけじゃないと思うのだが。

…さて。

これからどうしようか。

やみくもに執行長と夢の神様を罵倒するのにも飽きてきた頃、葵はようやく現状に目を向けた。

いくら合理主義者で現実主義者でも、葵はそろそろ気がついていった。

ぶっちゃけ夢じゃないかもしれない。

生理神経心理学という怪しげな分野で院に通っている葵には、今体験する五感からの刺激が夢ではないことは明白だった。

だって寒さが断続的じゃないし。無意識にまばたきしてるし。

だからこそ葵は、あっさりと科学研究の姿勢に切り替えてみる。

目の前の現象Aに置いて、ただ一つ、確信できるものは何か。

回答、この世界が現実ではないということ、だ。

夢にしろ別物にしろ、これは葵の現実じゃない。だって現実じゃ1DKのエアコンないアパートに住んで大学行ってるただの民間人Aなのだ。

葵が思い立つとともに、ぽとりと足元に何か落ちてきた。

壁と同じ石造りの床に、薄闇でも鮮やかな色彩が一つ、横たわっている。

葵はショッキングピンク色の花を手に取り、通路へ向けて蠟燭の明かりで照らした。

「…ハイビスカス？」

造花のハイビスカスである。道理で香りが無いわけだ。

しかし蕾なのはなぜだろう。ハイビスカスはショッキングピンク色の花弁をぴたりと閉じ、涙のような形を模していた。

葵はじぶんのアパートより広い、一人ぼっちの牢屋内を見渡した。頭上も一応仰ぐが、通路の陽炎はそこまで届いてはおらず、天井の高さも解らぬ暗闇しか見えない。

「…誰もいないのに花が降ってきた」

さすが非現実。

こんなもんか、と納得して壁にもたれなおした葵は、すみやかに明日の裁判へと考えを戻す。

この世界ではすでに堕ちるとこまで堕ちてる私。

葵は今の現行犯逮捕されて牢にぶち込まれているらしき現状を想う。

小心者ですよ。ええ、特技は学業、趣味は研究です。

友達とお茶行く時は店からナプキンとポケットシュガーお土産にするような貧乏臭い女ですよ。

だからこそ甘い状況じゃなくて？

二度目に自問する葵の顔にふと、どこか邪悪な笑みが浮かんだ。夢か幻か、葵はこの世界に自分と一緒に紛れ込んでしまった茶色い封筒に纏わるストーリーを想う。

『アオイは大金持ちになれるよ。』

…ごめんね、クレイマー博士。

でもうちの大学の研究所、資金欠けさ。ヒトを研究対象にする場合は、研究倫理委員会がね、人権だの口出して煩いからね。

現実じゃ愛の研究は難しいんだよ。

暗い牢屋の中で一人、葵は物言わずに膝を抱え、ふと満足げな息をついた。

そんな葵の手元には、まだ花開かぬ模造のハイビスカスが握られていた。

**独白：甘い状況なんじゃなくてえ？（後書き）**

アオイちゃんやつと芽生えた探究心。でやつと話が展開…  
次は裁判です…

## 四人の刑務長

翌朝、初めて見る牢番が個別牢の鉄格子を開けに来た。

紺のつば帽子は執行長の胸ポケットにあったのと同じ金糸の獅子が縁に刺繍されてある。

葵は足元を蠟燭の陽炎に照らされる石造りの通路を抜けて、同階の浴室へと案内された。

湯船は薄紅色の楕円型をした石造りだ。水嵩が浅い分、両手両足を伸ばせるほどの広さがあった。

1DKのアパートにあったダンボール箱みたいな湯船とはだいぶ違う。

水道や石鹸等の使い方を心配をしたが、親切にもすでに湯船は張られていた。

葵は去り際の牢番に指示されたとおり、適度に温かい湯を浴びて体と髪の毛の汗を流した。

柔らかい水はここで目覚めてより掃除と尋問三昧だった四肢の表面をほぐすようになめらかに滑る。

ありがたい慈悲だ。手元のハイビスカス以外はずっと裸だけど。

湯浴みを終え、石造りの床をぺたぺた渡り更衣室へ移動した。

葵が渡されていた分厚いバスタオルで体を拭いていると、ドアが開いて執行長が入ってきた。

「これに着替えろ」

執行長はそう言って、素早くバスタオルで身を包み床上で縮こまる葵にばさりと服を投げかけてきた。

あの、昨日から容疑者の扱いひどくないですか。  
有罪判決が出て囚人になった暁にはどんな目に遭うというのだ。

執行長は昨夜と同じ黒一色のシャツ、ネクタイ、ズボンの制服姿だった。ただ一つ、灰色のケープのような膝丈の物を肩から羽織り、胸元で組んだ両腕をそれに包んでいる。

執行長が無言で視線を注いできて、葵はしぶしぶ足元に投げ出された服を拾った。

ベルベットののような光沢を放つ漆黒の生地は下半分をふわり膨らませて、純白のレースフリルがふんだんに織り込まれてある。

嫌な予感がした。

「裁判は半刻後に開かれる」

「ゴスロリ？」

葵はバスタオルが落ちないように両脇を締めつつ、服を広げて全貌を眺めた。

まあアンティーク。

下着に次ぎホワイトブリムまで転がり出てきましたが。

「ごすろり？それはザリア地方のメイドが着る服だが」

そういう捉え方もあるのか。

葵は膝元にメイド服を抱えて執行長を見た。

「なぜですか」

「俺の趣味だ」

そうなんだ。はっきり言われるとつっこめないな。

まるで正当な理由を述べたかに背を向けた執行長は、言葉を失う葵を置いて模造の花が横たわる方へ歩いた。

灰色のケープは背中に大きく金糸の獅子が縫いこまれてある。獅子はラッセローネ艦か、またはザリア地方の紋章なのかもしれない。今はどうでもいいが。



執行長は灰色のケープを揺らして腕を伸ばし、ハイビスカスを拾った。

「ほう？まだコソコソと隠し持っていた密輸品があったか」

「ムリがあります」

どこに隠せたと言うんだ。

二十四で初めて異性からコスプレグッズを与えられた葵は様々な恨みを込めて睨んだ。

「丁度いい。着替え終えたらその地味な色の髪に差してやる」

執行長はそんなことを言っただけでハイビスカスを手に出て行った。

え、やだそんな昆虫色。

☆

マホガニーに似た美しい木目を浮かべる円卓を、三人の青年が囲んでいる。

背後の半透明の象牙色の壁は、頭上三メートルの高見で金属らしき錆色の鉤を二つ張り出しており、そこから二枚の旗を下ろしていた。

一枚は無地の赤褐色、ザリアの地域色。

もう一枚は天を喰う獅子の精緻な刺繍を金糸で黒地に浮かべ、刑務艦ラッセローネを誇示している。

「十五、六の幼い少女だと聞き及んでいますが」

「え？俺は百歳過ぎたばあちゃんだって聞いたぜ」

「今日の裁判のことはラッセローネ中が知ってるからねえ。囚人の噂に尾ひれのひとつもつくんじゃない」

ラッセローネ艦の最高責任長たちは、この午前、裁判官として立ち会う合議審についての事前の討議をしていた。

漆黒の髪 of 青年がまず結論に口を開いた。

「僕は賛成ですね」

彼は暗紅色の双眸を伏せ、円卓の上に置かれる一枚の自白書を一瞥した。爪の先まで手入れされた細く長い指を組む。

「女というだけで僕には価値があります。掃除ごっこ、戦争ごっこなどゲーム大会の景品に使えますから」

青年は薄紅色のフリルの襟元に灰色のケープをかけなおして言った。

「俺もほしいな」

別の青年がうなずいた。右肩でゆるく一つに束ねた腰までのプラチナブロンドを手の甲を使って払う。

「助手欲しかったとこなんだよ。レディがガーゼについた血を洗う姿ってぞくつとくるよな」

青年は明るい笑顔で琥珀色の肌の頬に一つだけえくぼを浮かべ、灰色のケープを下敷きに頬杖えをついた。

「私も大歓迎だねえ」

三人目の言葉に、先の二人が振り返った。

「がめつい貴方なので反対するかと思っていました」

「レディは金かかるんだぜ？生理パッドとか」

「しかも収容に個別部屋を用意しなければなりません」

二人が口々に指摘すると、傍目には三色の美貌の主を揃え、御伽噺の中みたいに麗しかった円卓光景が急に生活臭くなった。

「しかしね？君たち考えてごらんよ」

三人目の青年は歌うように言葉を紡いだ。カナリア色の波のような癖のある髪を肩辺りで揺らし、椅子の肘掛けにもたれる。

「男一色のラッセローネに新しく女が入っちゃった。そうなれば今の設備では足りない部分もあるよねと、本土から運営資金がもつとたくさん送られてくるじゃない」

「なるほど。現状収容しているのは統一で男性ですからね」

「そ。私はここで経理全般を任せちゃってるから、がっばり増えた資金を好きに使えちゃうよねえ」

青年はそう言って白いシャツの前ボタンの上で灰色のケープを集めた。茶色い封筒を円卓の上から拾うと、真黒の目を片方だけ瞑って空っぽの封筒の中にふっと息を吹きかける。

三人が話し合っていると、重い両開きの扉が外側から開いた。

裁判の始まりを知らせる深く透き通った鐘の音が象牙色の壁に響く。

まず四人目の裁判官である執行長が灰色のケープを纏って一礼した。

次に黒白フリルのミニワンピースを着て、頭のホワイトブリムにショッキングピンクの花を差した格好の容疑者が現れた。

女容疑者は執行長の背後に隠れるようにして円卓の三人の元へとブラウンの敷き物の床を歩いてくる。

ある者は眉を寄せ、ある者は口角を吊り上げ、ある者はガン見した。

次には三人揃って口を開いた。

「」「有罪」」

円卓を囲う三人が唱え、今まさに裁判の間に踏み込んだばかりの葵は眉間に皺を寄せて隣の執行長を見上げた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6434m/>

---

愛を召しませ

2010年10月10日07時01分発行